地域のご要望にこたえて
③北海道江差高等学校との連携

北海道教育大学函館校 地域協働推進センター
センター長 齋藤征人

北海道江差高等学校（以下「江差高校」）では、2022年度入学生教育課程「総合的な探求の時間」（1～2年次）のなかに「地域学（仮称・南檜山学）」を取り入れ、江差町、厚沢部町、乙部町、上ノ国町にわたる多様な地域資源を活用した「地域探求学習」を導入することになりました。地域と自己の学びとの関わりから問いを見出し、課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現する一連のプロセスを通じ、学びを深める手法であり、教師が立てた問いに対して、生徒が正解を出す学習ではなく、生徒の主体性をいかに引き出すかが重要なカギになります。

本学では、地域で活躍する上で必要な実践的課題解決能力を養うために、2015年度に国際地域学科全学生の必修として新設された地域課題解決型PBL（「Problem Based Learning＝課題解決型学習」かつ「Project Based Learning＝企画構想実施型学習」）科目「地域プロジェクト」のノウハウがあり、テーマ数の多さは全国最大規模です。そこで、こうしたノウハウの提供について江差高校より申し入れがあり、準備委員会立ち上げの段階から本学と連携・協力していくことになりました。第1回目の準備委員会は11月9日（火）に江差高校で行われ、檜山教育局教育支援係をはじめ、江差町高齢あんしん課、江差町社会福祉協議会、江差町教育委員会、乙部町教育委員会、厚沢部町教育委員会、江差高校PTA、江差高校学習支援員ら計16名が参加し、本学からは筆者が参加しました。

今後は江差高校の生徒においても、多様な分野で活躍する地域の魅力的な大人たちとの真剣な関わりから、よりよい大人になりたいという社会的自立心が育まれることでしょう。新たな時代の地域創生人材の養成に、本学としても微力ながら協働していきたいと考えています。

必須科目に「南檜山学」

江差高 地域の課題を探る

【江差】江差高は来年度、1、2年生の「総合的な探究の時間」の中で地域を題材にした授業「南檜山学（仮称）」を導入する。必修科目として位置付け、生徒たちに地域に関心を持ってもらうとともに、自ら地域課題を見つけ、解決策を探るなど主体性を養うのが狙いだ。

「南檜山学」では地元住民が外部講師となり、生徒は産業や歴史、文化、自然、医療など、南檜山のさまざまな分野について学ぶ。1年生は週1時間、2年生は週2時間を設ける。

テーマごとにそれぞれゼミを設け、生徒たちはフィールドワークを行い、取材した内容をまとめる。学年末には、各ゼミごとに1年間の取り組みの成果を発表する予定だ。

導入に向け、11月9日に江差高で開かれた第1回準備委員会は同高で第1回準備委員会が開かれた。武藤禎弘校長や檜山教育局の職員ら17人が出席し、大学教授も講師に招くことなど授業内容について協議した。出席者からは「地域の協力を得るなら、地域と学校の双方にとって利点が生まれる仕組みが必要」とした意見も出た。また、生徒が地域課題に取り組む岩手県遠野市の遠野高の活動も紹介された。

武藤校長は「『南檜山学』を通じて、生徒たちに自ら考え、行動する力を身に付けさせたい」と強調。「地元について学ぶことで、卒業して檜山から転出したとしても、地元への愛着を持ち続けてもらえるようにしたい」と話した。道南では、松前高でも同様の授業を行っている。（宮崎将吾）

江差高で開かれた第1回準備委員会

北海道新聞（令和3年12月2日朝刊14面）に掲載された記事